

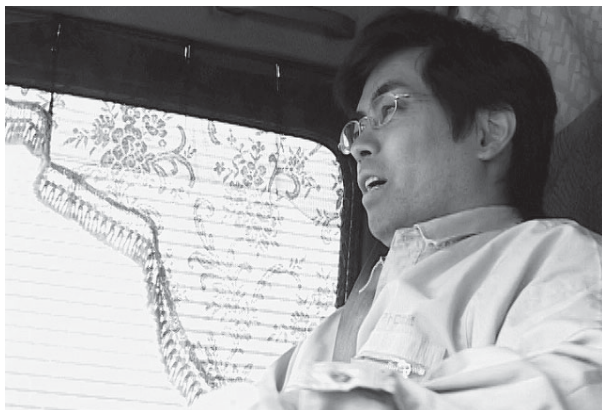
連載
映画から
見えてくる
世界

第15回

上映は玄関先がいい

『レイバー映画祭——遭難フリーター』
『フツターの仕事がしたい』など

木下 昌明（映画評論家）



働く者の新しい活気にみちた組合づくりを広めようと「ユニオン・エス・キャンペーン」がはじまった。その一環として九月二十四日に催された「レイバー映画祭」がおもしろかった。作品を上映順に列挙すると、ジョン・フォード『怒りの葡萄』、ヤミナ・ベングギ『移民の記憶（父編）』、ケン・ローチ『ピケをこえなかつた男たち』、ビデオプレス『君が代不立』、全金本山労働組合『本山闘争・激闘34年の軌跡』、木下昌明三分ビデオ『娘の時間』、岩淵弘樹『遭難フリーター』、土屋トカチ『フツターの仕事したい』の長短合わせて八本である。

わたし自身、映画祭の実行委員の

一人だから、自分たちで企画したものを自画自賛するなんて度しがたい限りだが、それでもあえておもしろかったといいたい。それは一本々々の作品の魅力もさることながら、それ以上に作品を連続してみることで、一本だけではみえなかつた労働者の日常と、そのたかいたの状況や作品同士が補完し合つて、予期しなかつた効果まで引き出して厚みのある印象を与えてくれたことである。『怒りの葡萄』は六八年も昔の名作であるが、土地のない農民の実態は、そのままいまの日本のフリーターや派遣などの非正規労働者のさまよう姿であり、時代をこえて少しも変わらない

資本主義の露骨な収奪と搾取をみる
ことができるし、フランスを底辺で
支える移民労働者のルーツをたどつ
た『移民の記憶』も、サッチャーの「規
制緩和」によって日雇いにされたり
バブル港湾労働者の『ビケをこえ
なかった男たち』も、そのままいまの
日本の過酷な労働環境を映し出して
いる。

そして、これらの外国もの以外は、
すべてこの「キャンペーン」にかか
わった人々の自前の作品であること
も特徴の一つ。そこでは一般の劇映
画とは違った、食う着る寝るの労働
そのものを基本にした作品ばかりと
いうことで画期的な映画祭ではな
かったか。なかには『本山闘争』とい
う当の組合員たちが自らの手で記録
しつつけた作品もある。これは宮城
県の本山製作所が組合活動家を首に
したことに端を発し、「一人の首切り
も許さない」を合言葉に、会社側の
ロックアウトに対抗して門前闘争を

くり広げ、ついに全員の職場復帰を
はたした労働者の執念のドラマ―な
んと二十代の若者が五十代になつて
いた。この作品は決して一般には公
開されないだろうが、ホッピー族
の労働者魂のなんたるかがみえてこ
よう。画面も、モノクロ写真↓音声な
しのモノクロフィルム↓カラーへと
移っていくなかに歴史の変遷がみら
れるし、ラストシーンでの若き日の
写真と現在の白髪まじりの表情を対
比するなかに一つの生き方を貫いた
ものの豊かな輝きがみてとれる。
しかし、ここでは一本々々にふれ
る余裕がないので、若い二人の二本
の新作にふれるにとどめたい。

一本は岩淵の『遭難フリーター』
(67分)。これは製作者が『新しい神
様』(99年)の土屋豊、アドバイザーに
『生きさせろ!』の雨宮処凛が名をつ
らねているように二人の協力が大き
い。映画の特徴は、一三歳の監督・撮
影の岩淵が自分を主人公にしてその

行動や心境を撮っていることだ。か
れは派遣会社から埼玉県のキャノン
工場に送りこまれ、派遣会社のア
パートでくらし、そこで貧しい食事
や自転車通勤に急ぐ姿を撮ってい
る。給料は一九万円で、諸経費を引
かれて一二万円。借金が六万円ある
から月六万円で生活している。盆休
みには「あこがれ」の東京に出てフ
リーターで働く。そんな生活にかれ
は「出口がない」と訴えている。この
手法は、かつて土屋が『新しい神様』
を撮ったとき、まだ右翼だった雨宮
にビデオカメラを渡し、彼女が部屋
で一人で鏡台に向きあうようにカメ
ラに語りかけているシーンがあるが、
それを発展させたものだ。このよう
に自分で自分を撮るのがいい。それ
によって自分が客観化・対象化でき
るからだ。そのなかで、フリーターの
困窮を訴えるNHK『クローズアッ
プ現代』に岩淵が出演するシーンが
興味ぶかい。顔にモザイク、作業衣

は別会社のもの、音声もかえて、かれは別人として登場している。テレビの裏側もみせる。「人の不幸を食いのにしている偽善者」と自嘲気味のディレクターのジレンマを岩淵が聞き出すところなど、テレビジャーナリズムへの批判になっている。

岩淵が一時帰郷する仙台の実家のシーンも考えさせる。二階建ての家にピカピカの車があつて、かれの工場生活とは裏腹の充たされた生活がそこからかいまみえるからだ。いざとなれば家があり、スネをかじる親もいる。これは岩淵だけでなく、いまの多くの若い非正規の実態である。ここから、政治に行きつまった日本の政財界が、労働法の改悪を押し進めて娘や息子を介して、いくらか蓄えのある両親世代まであてこんで根こそぎ搾り取ろうとしている構図もつけてみえてくる。といつてもそのことを岩淵は意図していないようだが、この映画の原動力は、あくまで岩

淵自身の若さとエネルギーにある。かれは血の気が多く反抗的である（それはいいことだ）。しかし、そのエネルギーは常に搾取される対象にしかなくていい。そこで一人で「出口」を求めてあがくことになる。その結果、一人でひたすら夜道を歩きつづけるラストシーンとなる。わたしはそこにいまの「出口なし」の若者像の典型をみるが、同時に、四〇年以上も前のわたし自身の姿もみいだす。わたしもまた同じようにあがき、アナーキーな「実存」の心情にひたっていた時代があつた。だから、この映画には、ほろ苦い感情がわいてきた。こういう若者の作品もあつていい。

これと対照的なのが、土屋トカチの『フツの仕事をしたい』（47分）である。かれは岩淵とは一回り年長の三六歳で、はじめてビデオを撮ったのはレイバーフェスタの第一回の三分ビデオ。そこで解雇された自分を撮った。その後、日本の建設・輸送

産業に携わる労働者がつくった全日本建設運輸連帯労働組合のドキュメンタリー『われら生コン労働者』を手伝い、さらに同組合の活動を撮りつづけて、組合も協力するなかから、これを基に生み出したのがこの作品である。土屋がカメラを向けているのは、同じ年のセメント輸送のトラック運転手皆倉信和。かれは住友大阪セメントの下請けの下請け東都運輸でオール歩合制で働いている。給料は一カ月五五二時間も働いて社会保険なしの三〇万円という。

わたしは三年前にみたNHKスペシャル『トラック・列島3万キロ』の時間にがんじがらめのドライバーの日々を想起したが、いまや運転手はどこでも同じ境遇におかれていることを思い知らされた。しかし、この映画の魅力は、「不幸を食いものにする」被虐待者が好きなNHKとは違って、皆倉が組合に入って会社側とたたかいはじめる姿を撮っている

ところにある。それでも皆倉は小柄でおとなしく、声を荒げることもない。かれが会社側の強要で組合を一度は脱退するシーンもある。そんなシーンをみていると、組合に入ることの困難さもよくわかる。

この映画に二つ見どころのシーンがある。一つは社長の用心棒が屈強そうな男たちをつれて皆倉の母の葬儀にまで押しかけ脱退をせまるシーン。かれらはビデオをもった土屋たちに襲いかかり、ビデオを叩き落とす。それでも土屋はビデオを拾って回しつづける。これにわたしは息をのんだ。のちに映像が証拠となつて用心棒は逮捕された。

二つめは、皆倉が倒れて病院で手術をうけたことがきっかけとなり、大勢の組合員が親会社の住友に押しかけ、「仲間が倒れた」と抗議するシーン。それも普通の抗議ではない。会社の玄関前にスクリーンを張り、『労働者は奴隷か?』と題して労働の

実態や暴力シーンを上映してみせる。それを会社側の人々がビルの柱の陰などからじつと見ている。そのかれらの横顔を土屋は撮りつづける。——これはマイケル・ムーア方式の日本版だ。

映画は劇場でみせるものと限らない。劇場がなくなつてみせられる。特に下請けの実態に無関心な親会社にみせるには玄関先が格好の場所だ。労働者の文化とは、既成のテレビのショーや新聞雑誌の「文化欄」にあるのではなく、こういうたたかいのなかにもこそある。事実、上映は大きな成果をおさめた。会社は謝罪し、皆倉は労働条件のととのつた新会社で働くようになった。その上に親会社の体質も労働法にのつとつたものに変えさせることができた。

土屋の映画で欠かせないものももう一つある。それは画面には声や背中ではわからないが、いつも会社との交渉の先頭に立っている白髪頭

の人物——かれは書記次長で、時には社長ともみ合いいつも組合の主張を貫き通している。その姿からは、長年、会社とわたり合つてきたものもつ自信と余裕がみてとれる。皆倉が暴力にひるみつつも立ち向かつていけるのは、こういう生きた「ユニオン」が傍にいるからだとなつてきた。

グローバリゼーションによつて荒廃した現代日本、「規制」のタガが外れたことをいいことに資本家は欲望むきだして利潤追求に血道をあげている。その汚れた手で大人しい若者たちの「生存権」すらむしり取ろうとしている。そんななかでこれに對抗する映画が一本でも二本でも生まれてきていることは、労働者にとつて明日への希望となろう。

土屋トカチ「フツの仕事をしたい」は、12月15日(土)東京ウイメンズプラザ「レイバーフェスタ07」で再上映あり。